

# ポール・クローデル、1900-1905年の危機

——『真昼に分かつ』論——

鹿毛 憲 一\*

## 00. 序

ポール・クローデルの『真昼に分かつ』Partage de Midi は、1906年秋出版されている。この劇が書かれたのは、クローデル自身が置かれた深刻な信仰の危機がその契機になっていることはよく知られているところである。現実には彼に起こったことは、1900年夏、それまでのこの世での仕事（外交官、作家・詩人）の一切を放棄して修道志願を心に決め、修道院にこもったことである。が、そこで彼が聞いた神の答えは「ノン」であった。深刻な失意のうちに再び赴任地の中国へ向かう航海中、ひとりのポーランド人である人妻との恋愛に陥るのだ。この事件は、クローデルのうちに大いなる危機をもたらし、最終的に決定的な破局を見る。この作品に描かれるメザとイゼの恋は、この時の詩人の体験がその下敷きとなっている。<sup>1)</sup>

この作品は、三幕からなっているが、時代背景は、中国が清朝の末期、列強が中国を侵略し、それに対して中国では外国人排斥運動が高まった時代である。<sup>2)</sup>

登場人物は、外交官であるメザ、農園を営んでいるらしいアマリック、フランスのインドシナでの鉄道敷設計画にあずかろうとしている技師ド・シーズ、そして彼の妻イゼの四人だけである。<sup>3)</sup>

この小論では、この作品を辿ることにより、自分自身の体験を殆どそのまま持ち込んだという主人公メザの苦悩と危機の内実を探りたいと思う。

## 01. 真昼

第一幕は、ヨーロッパから中国へ向かう航海のほぼ中間地点であるインド洋上の甲板が舞台である。当時ヨーロッパから極東アジアへの航路は、マルセイユか

ら香港まで約四十日を要したらしいが、舞台はその客船の上。遮るもののない強烈な太陽が照りつけ、青空と紺碧の海だけが幾日も続く、殆ど時間が止まったような航海のほぼ中間点、そしてまた時刻はこれも一日を二つに分けるまさに正午。太陽も頂上にある、まさに分岐点を示すその時である。舞台は甲板の上、天蓋を開ければ、そこからは全てを射抜き、全てを燃え尽くすほどの「荒涼たる火」「光線の剣」<sup>4)</sup>が注ぎ込んでくる光の密室に閉じ込められた四人のあいだに起こる運命を分かつドラマである。

彼らの航海は、ヨーロッパを出発して既に二十日ほどが経過している。つまりその間この同じ船の中に閉じ込められているのである。メザとアマリックは同じ独身ということもあり、比較的同じ時間を過ごしているらしい。幕開きはこの二人の会話から始まる。

「ついにまとわりつかれたな」「決めたわけじゃないまだ」<sup>5)</sup>

当時フランスは、中国、インドシナに獲得した自国の権益に基づく事業のために民間人を活用していて、それにあずかろうという人たちが役人に近づいていた。ド・シーズも技師としてアジアでの事業に参加しようと、家族と共にこの船に乗り込み、外交官であるメザとタイでの鉄道敷設の件でしばしば話し込むようになっていた。そのことについてアマリックがメザに忠告しているのだ。そこへ噂のイゼとド・シーズの夫妻が姿を現す。時刻はちょうど正午。それを知らせる鐘の音とその後続く汽笛は、遮るものとなない大海の上を容赦なく照りつける太陽の下で、ただその圧倒的な力に捕らえられた彼らにとって、異様なものとして、しかしある種通底するものとして聞こえてくる。

\* 本学キリスト教科助教授（フランス文学）

「なんという叫び声だ、荒涼たるこの火の無人境

に」<sup>6)</sup>

光(=太陽)と鏡(=海)との間で、彼らはそれぞれ自分が何者であるかを意識せざるをえない。

「こいつは鉄砲だよ、まるで。こいつはもう、太陽なんてものじゃない」「雷の火だ。まるで反射炉のなかに追い込まれて、燃えつきたようだ」「すべてが恐ろしいほど純粹だ。…まるで二枚の鋭いガラスのあいだにつかまった風だ」

「いまはもう恋人なんてものじゃない、海を犠牲にする死刑執行人だ。接吻なんてものじゃない、臟腑えぐる短刀だ。海は太陽の一撃ごとに体で答え、形もなく、色もなく、純粹で、絶対で、巨大で、ざらざらと炸裂する海、光線の剣に貫かれて、光線のほかには何も返さない」<sup>7)</sup>

ここにすべてを燃やしつくす炎のイメージが提出されている。四人の登場人物のほかには太陽こそが、この閉じられた世界を容赦なく照射し、精神の内部までも貫く重要な存在だ。

## 02. イゼ

登場人物の中でイゼは、太陽とともに重要だ。彼女は、ド・シーズの妻となって十年ほどが経過している。この時点で少なくとも二人の子供がいて、さらに一人を幼くして亡くしていた。アマリックとのあいだには、ド・シーズとの結婚以前、やはりたまたま乗りあわせた航海中恋愛関係におちた事があった。それがまた、今回の航海でまた偶然乗りあわせていたのだった。そして接吻しているところをメザに見られてもいる。

この作品の主人公であるメザは、外交官として有能な独身青年なのだが、修道希望があり、自分の仕事(というよりはこの世での仕事)との間に葛藤があり、修道院生活を送ったものの、そこで見つけた神の答えは「ノン」であり、失意のうちに再び赴任先の中国へ戻るところであった。そういう生真面目なメザにとってイゼの存在は、子供もいる妻でありながらアマリックの情事の相手という「恥じ知らずの浮気女」<sup>8)</sup>でしかなかった。

とはいうものの、アマリックの言によれば、「君は彼女の気に入ったらしい、君のことが気になって仕様がな、どう思われているか知りたがっている」<sup>9)</sup>

らしい。そしてメザの方も、普段煙草を吸わないのに、イゼに差し出された煙草を最後まで吸ってしまって、アマリックから「まるで敬虔な信者だ」<sup>10)</sup>と冷やかされている。さらに、次のような忠告を受ける。

「浮気女なんてもんじゃない、用心したまえ。女戦士だ、征服者だ。…無器用に、まるで地面を蹴ってそそり立つ大きな獣だ。…まるで裸馬だ、まっしぐらに走る。狂ったように、何もかもぶちこわし、自分自身までぶちこわして駆けて行く。…首長の女だ」<sup>11)</sup>

そのイゼが言う。

「このわたしきたら、どこにも自分の居場所がない」「わたくしたちきたら、四人ともお互いさまに、居場所をきめることもできやしない」<sup>12)</sup>

本来太陽のごとき情熱の持ち主で自由奔放な彼女も本当の自分が向かうべき場所を知らない。そんな彼女がメザに近づいて、肘をもたせかけるように横にすわると思い切り罵倒されてしまう。

「いまだかつてわたしがそんな扱いを受けたことがないようなやり方で、わたしのことを。だからわたし、あやまったわ、そしてさめざめと泣いてしまったのよ小娘みたいに」<sup>13)</sup>

で、メザとイゼは二人きりになった時にお互いの気持ちを理解し合うようになる。「所詮、恋なんて茶番」<sup>14)</sup>と考えていたメザがイゼの気持ちにに応じて、次第に自分の気持ちを吐露していく。「人間たちのあいだから足を洗い、脱出することになっていた」<sup>15)</sup>自分の心がイゼに捕らえられ、アマリックに嫉妬していることを。しかし同時に彼は神にも捕らわれているのだ。このことはメザが修道院への道を拒絶されたと考えたとしてもいささかも変わりようがないのだ。

「永久にですよ。ほかでもない、自分のなかにです、自分自身のなかに、もう一人の人間を耐えしのばなくてはならない、彼が生きている、ぼくが生きている。彼が考える、そしてぼくは、彼の考えの重みを、自分の胸のなかに測る」<sup>16)</sup>

自分自身を言葉に喩えて、神との関係を説明するメ

ザの自我は自分だけの居場所を見つけようとしてもがき続けているように思われる。

「言葉というものだって、言葉が自分自身を理解するということがありますか。言葉が存在するためには、その言葉を読む別の存在が必要なのです。ああ、自分が隅から隅までいっぱい愛されているという喜び。ああ、真ん中から自分が一冊の書物のように開かれてしまいたいという願い。自分自身というなら、ただ単にそれだけのことだ。つまり、完全に明らかで、読まれ得る状態にある。ところが、そうではなくて、現に今、自分というものが発音されている、そう感じる、一つの単語が、声に、生きた言葉の抑揚の波に支えられて存在するのと同じに。ああ、自分というものが、まるで誰かに一字一字声を出して読まれていく綴り字なのだと感じるときのあの拷問」<sup>17)</sup>

つまり、純粋に神の道具として、ただひたすらに神の御旨を果たさんと辿るべき道を歩もうとする時、そうした自分自身が神の愛に満たされていることを神に読んで欲しいという願いがメザの中には確かにある。つまり可能態としてのほくらの存在。それはあくまで可能態としてのそれであり、ほくらに与えられた自由意志もそういう存在なのだという認識はまだしも、自分の思い、言葉、行いすべてが発音される綴り字でしかなく、一切が自分のものとして感じられない状態は、人間として悲しむべきことなのだろう。

「ああ、何もかも見たい、自分のものにして所有したい、目だけではなく、感覚だけではなく、精神の叡知をもって、そしてすべてを識りたい、自分のすべてが識られるようになるために」<sup>18)</sup>

それゆえにか、メザは修道院での神の沈黙に「ノン」の答えを聞き、「自分の方向と意味、自分の目標を見失ったまま」<sup>19)</sup> この世に送り返されたのだった。

メザは、この午後、この「禁じられた女」<sup>20)</sup> イゼとの長い会話を通して、ついには愛を告白する。

「どうして今になって、あなたに会ったのだろう。ああ、ほくらは、ほくらは喜びのために生まれていたのだ、受精した花の壺のなかで、よごれた球のように酔いしれている、あの密蜂と同じだ」<sup>21)</sup>

しかし、イゼは、愛してはいけないと言い、メザにも「ほくらはあなたを愛しません」と言わせるが、二人の心はしっかりと結ばれることになる。

そして、アマリックが戻ってきて、さらにはド・シーズが戻ってくると、太陽は西の海を金色に染めながら、静かに沈んでいく。夕食を知らせる鐘がなり、それぞれが新たな感慨をもって（「ああ、これでほんとうにわたしたち、スエズを越えてしまったのね」<sup>22)</sup>）その光景を眺めていた四人は食事に行くべく腰をあげる。ここに四人の関係、特にイゼとメザの出会い、そして彼らを結びつけ、それぞれの位置を明らかにしようとする太陽の存在が、この作品全体を通してのテーマとして明示される。

#### 04. 愛の炎

第二幕は、前幕からおそらく一ヶ月ほど経過している。舞台は香港のとある墓地のとある墓標の前、この墓地は、かなり急勾配の山の中腹にあり、木々が生い繁り、眼下に香港の街、港、さらには中国大陸の一部などが眺望できる場所にある。四月の午後、空は今にも荒れそうな様子である。<sup>23)</sup>

メザは、イゼに呼び出されてここに来ている。全くの見知らぬ土地にやってきて、不安を感じているイゼに、ド・シーズは一ヶ月の別れを言いだしているのだ。メザに頼んでいた仕事を引き受けて、ひとやま当てようとしていた。さらに、混乱期の中国の革命運動を支援することでも稼ごうとしていた。<sup>24)</sup> 税関長としてのメザはそのことを知らないふりをしていた。

イゼは、誘惑の予感を感じつつ、ド・シーズを留めようとする。しかし、ド・シーズの決心は固く、メザが紹介した二つの仕事のうち、インドシナでの電信線敷設事業に加わることを決める。とりあえずは、一ヶ月ほど留守にするという。イゼにとっては長い別れだ。メザとイゼにとって禁じられたものが反故になるのにさほど時間は掛からないだろう。

いまや二人のあいだに燃え上がった愛の炎はすべてを焼きつくす勢いだ。

「ああ、そんなに強く抱きしめて、息がつかまる。かわいそうなイゼ、イゼがこんなにも厳しく禁じられていたとは思わなかった」「わたしたちが激しく求めているのは、けっして創造ることじゃない、破壊すること」「あなたであり、わたしであるという代償を払い、二人が身を捨て、投げ出され、引き抜か

れ、引き裂かれ、燃えつきて、わたしに感じられさえずればいい、あなたの魂が、永劫の時であるこの一瞬に、わたしの魂に触れて、捉える、わたしの魂を、まるで石灰が燃えながらはぜて、砂を捉えてしまうように」<sup>25)</sup>

もう既に、彼らを取り囲む世界から完全に隔絶されて、二人以外には誰もいない世界へ入りこんだのだ。彼らのまわりの世界を破壊しつつして、死に至るまで二人だけで形づくる世界だ。過去も未来も、家族も子供も夫も友人もない世界だ。

こうなると、イゼの目は「燃えさかる魂の巨大な黒い炎」<sup>26)</sup> となって、この愛を妨げるものと許すものの区別以外の区別はなくなってしまう。夫ド・シーズの存在は、愛を妨げる存在でしかないのだ。

「死にたきゃ、死ねばいい。死んでくれたら、なおありがたいわ。わたし、もうあの人なんて、見ず知らずの男よ」<sup>27)</sup>

そこにド・シーズが戻ってきて、イゼの涙に負けてメザから紹介された仕事のうち、香港の税関で働くことにしたいと言う。イゼを残して行けないと言う。自分の夢を犠牲にして家族のために残ると言う。しかし、ひとやま当てようとしてここまで来たド・シーズは、仕事の内容を聞いて再び決意を翻す。勇気、優れた判断力と指導性が必要なインドシナでの鉄道敷設の仕事と香港での机にしばられた税金取り立ての事務の仕事。男気をくすぐられたド・シーズは、ついに前者を選ぶ。

彼はメザに感謝して言う。

「全く、あなたはわたしの善良にして、かつ誠実な友人だ」<sup>28)</sup>

全く、「知らぬが仏」のお坊っちゃんなのである。

## 05. 埋まらないころ

第三幕は、それから一年以上が経過している。場所は中国南部のとある港町。「植民地風」の家の二階の大きな部屋が舞台である。清朝末期の中国の混乱は頂点に達し、外国人排斥の民衆暴動・反乱が各地に広がっている時である。外国人焼き打ちに対してバリケードを築き、土嚢を積み、マットレスでふさいでの

包囲戦に部屋のあちこちに穴が開いている。時折、銅鑼を打つ音、爆竹、火器の音などが聞こえてくる。次第に太陽が沈みゆく夕暮れ。長い光線が、人気ない部屋に差し込んでいる。ここも襲撃にあったらしく、その時応戦した小銃と薬笈が机の上に置いてある。隣室の子供の泣き声が静まるとイゼが登場して姿見の前に腰をおろす。しばらくしてアマリックが登場する。

イゼはアマリックと暮らしているのだ。それもまわりを外国人排斥の暴徒たちに包囲されてである。この次の攻撃を受けたら、死を免れないといった状況なのである。沈んでいく夕日は、あたかも彼らの命を暗示しているかのようである。

イゼは、アマリックに手をさしのべ、抱き合う。彼がおきなおろうとすると、なお強く抱きしめ、ひきとめようとする。イゼは、前日目撃した襲撃の光景が目に焼きつき、またその襲われた時の人々の叫び声が耳をついて離れないのだ。仲間の連中がやられた今となっては、袋の鼠。あとは死を待つだけである。

しかし、アマリックはまだ落ち着いている。彼が昔使っていた召し使いが来てくれて、彼の手引きで、夜陰に乗じて舟で脱出する計画があるからである。また、夜の襲撃に備えて爆弾を仕掛けて、あとはスイッチを入れるだけになっているからである。脱出が不可能だとしても、その時はすべてを吹きとばす手筈なのだ。

「どうだい、素敵だろうが。…死ねんじやない、おれたちは、雷のなかで消え去るのだ」<sup>29)</sup>

そしてそれまでのあいだ彼らは、自分たちの来し方を振り返ることになる。

イゼは言う。

「ああ、わたしがしたすべてのこと。いったい、わたしの、それとも、ほかの女。わたしは夫を裏切り、捨てた。わたしの子供たち、わたしのかわいそうな子供たち、わたしはあの子たちを置き去りにしたまま、今どこにいるのか、それさえも知らないでいる。それから、わたしが愛したあのひどい男、わたしを、自分の生命よりも愛してたわ、別れるとすぐ、わたしはあの男を裏切った、あなたに身をまかせました、わたしは、あの男の子供を宿したまま」<sup>30)</sup>

イゼとメザとの禁じられた恋は、夫ド・シーズの旅

発ちのあと、さらに燃えあがり、イゼは身重になるのだ。メザは、ド・シーズが留守中のことでもあり、目立たないように、しばらくのあいだ身を隠すように手筈を整え、イゼを旅発たせたのだった。イゼはその船の上で、再び偶然アマリックに出会ったのだった。

アマリックは、自分の農園での新しい事業のために働き手を探しに行く途中だったのだ。そして、イゼの身重は知らなかったものの、再びイゼをつかまえたのだった。子供が生まれてからも、アマリックはそんなことに頓着はしなかった。それよりもイゼを自分のものにしておきたかったのだ。イゼは、まだメザを愛しているようだったし、ド・シーズとの子供たちも呼び戻したいと思っていたようだが、アマリックにとってはどうでもよかった。

メザは、イゼと数ヶ月して再び落ち会うつもりだったが、イゼからは決別の連絡だけで、それ以外の連絡はなかった。メザは、それでもイゼの居所をつきとめ、手紙を書いてよこした。イゼは、メザを憎しみもしたが、自分のしてきたことに対しての罰とも考え、折りからの外国人排斥の嵐のなかで、死を待つだけになっていた。そして、あの誇り高きイゼが、いまでは次のようなことをアマリックに言うようになっていた。

「ねえ、アマリック、本当に神様って、全くいないの」「でもそれでいて、時々、わかるでしょう、執拗に、自分に注がれている視線を感じるようなそんな瞬間がある。そうなの、逃げ出すことができない。そして何をしてみても、たとえば笑うとか、あなたが接吻してくれるとか、それでも、その人は証人なの。今この瞬間にも、わたしたちをみつめているわ。こんなこと、神さま、あなたのお手をわずらわすほどの値打ちがございますの。たかが一人の女を相手に、こんな大袈裟で、こんな大まじめなことが必要なのですか」<sup>31)</sup>

イゼは、メザとの愛に生きたことを（生きていることを）自負すれこそ、後悔などしていないのだ。そして、メザの愛も強く感じていたのだった。

「あの烈しい渴き、恋の生み出すあの惨めさ、それも相手が生きているということ、お互いの目の中を見つめあう瞬間、別の魂を自分の魂と一つに、自分の中に突っ込むときがどんなものだか」<sup>32)</sup>

しかし、イゼはメザを「所有」することはできなかった。メザのなかには、「何か見知らぬもの」「不可能なもの」があって、それを自分に与えてはくれなかった。だから身を引いたのだと言う。

「今はすべてを受けいれます」<sup>33)</sup>

## 06. 悔恨

アマリックは、敵の包囲を脱出すべく手配を完了しに出て行く。イゼが身づくろいをしていると、階段を昇る足音がして、やがて扉が開く。

メザがやって来たのだ。イゼは、階段を昇ってくる足音を聞いたときから、ひどく震え、体を固くしたまま動こうともしない。扉が開いても、イゼはそのまま振り向こうともしない。イゼは、その足音に、メザのそれを確実に聞きとっていたのだ。

イゼの突然の失踪（それは暫くの間会わないでいることをメザが提案したことが起因していたのだが）の後、メザは懸命に彼女の所在を捜し求めた結果、居所をつきとめ手紙を書いたが、ラチがあかず、折りからの騒乱のただ中にある彼女に会いにやって来たのだ。

イゼは、椅子に坐わったまま身じろぎもしない。メザがどう語りかけようとも、一言も口を開かない。沈黙の間を持ちながら、長いメザの台詞が続く。

「ほくが何をしたって言うんだ」「ほくは、きみなしではいられないことがわかった」「あれは許しておくれ、あの時は逆上していたんだ」「もう、ほくを愛してはいないのか」「せめて、きみを、きみの子供たちのところへ連れていかせてくれ」<sup>34)</sup>

メザは、この別れの原因となった対応を謝るが、それでもイゼは何も答えない。メザは、それまでに何通もの手紙を書いていたが、イゼは愛していないという手紙を送っただけだった。それでもイゼの気持ちを信じられなかった。さらに、子供たちをも捨てたイゼを連れ戻そうとするのだ。

それでも何も言わないでいるイゼに、メザは激情から、非難の言葉を投げ、沈黙し、後悔し、二人の間に生まれた子供のことを問い質す。

その時、外にアマリックの足音が聞こえ、暗闇の中でマッチの火に照らし出されて二人の男は対峙する。

「この女とほくの子供を引き取りにきた」「どちら  
も、お前さんには渡せん」<sup>35)</sup>

暗闇の中で取っ組み合いが始まり、やがてメザは倒れる。ここまで沈黙をまもっていたイゼが、「人殺し」と叫ぶ。メザは骨を折られて気絶していた。

アマリックとイゼは、かねての計画通り、ポートでの脱出を決行する。アマリックに子供を連れて来るように促されて隣室に行ったイゼは、戻って来て、「死んだわ」と言う。そしてメザを置いたまま、ヒステリックな笑い声を残してその場を立ち去る。

## 07. メザの頌歌

月明かりだけの部屋の開け放たれた窓からは、輝く星空が見える。メザは我に帰るが、長い間瞑想にふけっている。そしておもむろに語り出す。

この部分は「メザの頌歌」と呼ばれて、この劇でも最も有名な場面である。が、クローデルは後年読み返して上演には不向きとして削除しようとした。<sup>36)</sup>

「わたしはここにいる、あかあかとわたしの通夜を守る燈明に囲まれて」<sup>39)</sup>

に始まるこれらの詩句は、いわばメザが黙せる神に語りかける祈りであり、黙せる神との一方通行の対話である。イゼとの愛の復活が挫折し、月明かりだけの中でメザが、自分の置かれた状況を振り返り、殆ど死を待つみの孤独と絶望の中での最後の告白なのであろう。まず、死(=私審判)を前にしたイメージがそこには提出される。

「すると見える、至る処から、右にも左にも、わたしのまわりを取り囲んで、高く燃えさかる炎の森が。灯された御燈明の火ではない、勢いたけき星々、さながら偉大な処女たち、神のお顔の前に炎を放つ姿、たとえば尊い絵姿をのなかで、後ろへ身をひく聖母のお姿。ところでこのわたしは、人間、知恵を備えた者、わたしは今、こうして大地に臥して、死を待つ、荘厳な靈柩台の上に横たわるものの如くに、宇宙の深い底の果てで、まわりを包むものは、星々のきらめく大きな泡の球、巢立ちする蜜蜂の群がり、そして祝祭の儀式。わたしには見える、夜の広大無辺な聖職者の集い。その司教たち、総大司教たちもともどもに」…「わたしはこうして今、

一人きりだ。信心深い信徒の群の取り囲む司祭などこの世の別れの聖なるパンを、ほくのところへ持って来てはくれぬ。だがすでに、天の門は打ち毀たれて、すべての聖者たちの軍勢が、手に手に松明をかかげ、わたしを目指して進んでくる、その取り囲む中央に見えるのは、あの畏るべき小羊」<sup>38)</sup>

その審判の前に、メザに思われるのは何ととってもイゼの存在。メザは言う。

「なぜ、あの女が。なぜ女が、突然、あの船の上に」<sup>39)</sup>

それまでのメザは、まったくの神の僕であり、彼にとつての神の存在は、

「あなたこそわたしのなかで、勝利であり、訪れであり、数であり、驚きであり、あふれる力、幻妙不可思議、そして鳴り響く音であった」<sup>40)</sup>

なのに、メザが自分の身を捧げようとする、拒絶し、彼を捕まえたのはイゼだったのだ。そのことで、メザは神の尋問が恐ろしくて仕方がない。揺れ動くメザのこころは、それでも神が答えないことを知っている。

「一度でもあなたの沈黙を味わったことのある者には、説明の必要はないのです」<sup>41)</sup>

神は、恐らく耳を傾けるだけであるのだろう。そしていつのときか、われわれの知らないやり方で、何らかののしるしを与えるのだろう。

メザは、自分の神への愛を反省する。

「おそらく、ほくはあなたを、正しく愛さなかったのだ、ただ自分の知恵と、自分の楽しみを増すためにだけ、あなたを愛した」「ほくは自分の傲慢さを呪う」「自分の虚無をいやというほど思い知らされました」「神よ、お救いください、もうたくさんなのですから」「あなたはこのようにしてほくをお罰しになった、他人の身の毛もよだつような愛によって」<sup>42)</sup>

メザのイゼに対する愛は、いまここに、孤独と絶望という罰を残した。しかし臆するところはない。

「愛の上には、何物もない、あなたご自身すらもない」「ぼくの罪は大きく、そしてぼくの愛はそれにもまして大きい」「あなたがぼくに与えてくださる死が、死というものだけが、この二つのものの大きさに適うのです」<sup>43)</sup>

いまここに、恋にやぶれ、ボロボロになっている自分。イゼは、メザの世界を破壊し、メザ自身をも破壊してくれた。そうすることで、イゼはメザのために最短距離を開いてくれたのだ。

「あなたにはよくわかりでしょう、こんなことはもう続けていられないと。それにぼくは愛なしではいられない、それも、今すぐに、明日ではなく、いつも永遠に、そしてぼくに必要なのは、生命そのもの、源泉そのもの、自分とは異なる、その違いそのものなのです」「ですから、もう一度ぼくをお手に取り上げ、そして、父上よ、かくまってください、あなたのお膝のなかに」<sup>44)</sup>

ここに至って、まったく絶望の淵からのメザの叫びは神のみ手の元に戻ることを望んだのだった。そこに彼の生命の源泉を再び見出したのだった。この世での生命は果てるとも、真の生命の基に立ち返ろうとするのだ。

## 08. 愛の業火

すると、外にかすかな音とともにイゼが登場する。イゼは放心状態で部屋に入ってくる。それから子供が死んだ部屋に入り、そこからイゼの泣き声が聞こえる。メザがイゼを呼ぶと、イゼは再び現れるが部屋の中をさまよい歩き、引き出しという引き出しをあげ、筆筒をあげ、棚をさぐり、他の部屋へ行き、必死に何かを捜している。すると突然、身の毛もよだつような泣き声が聞こえてくる。メザは再び力の限りにイゼを呼ぶ。暫くすると、髪をふり乱して純白の衣装のイゼが月の光をあびてヴェランダに現れ、やがてメザのところに来て、メザの足もとにうずくまる。イゼは我に返って、メザがここにやってきて始めて声をかける。

「メザ、わたしはイゼ。わたしなのです」「夢ではないわ。メザ、夢は終わりました。あるのはもう、

真実だけ」<sup>45)</sup>

メザにとって、そのイゼの姿は夢のようでもある。しかしイゼの長い髪の上に手を置いたメザは、その存在を確認して言う。

「きみの臓腑の底に、ぼくの吹き込む息がいきづくの。きみは、ぼくの言葉の力によって、新しく造り出された人間なのか。ああ、ぼくの生命であってくれ、ぼくのイゼよ、ぼくの魂で、ぼくの生命であっておくれ、ぼくの心であってくれ、ぼくの腕のなかで湧き起こる生まれいずる生命となれ」<sup>46)</sup>

メザは、神の前で言い放ったイゼへの愛を再び取り戻し、確認しようとする。二人の間には、恐れるものは何もないのだ。

「もう何も。永久に、愛のほかは、あなたと一緒にいる永遠のほかには」「それでは、もうできないのだね、ぼくには、このイゼを追い払うことは」「不可能よ、あなたのいるところには、いつもわたしがいるの」<sup>47)</sup>

ついに、二人を隔てるものは何もなくなったのだ。子供を死に至らしめ、メザを置きざりにしたまま、一旦はアマリックと逃げ出したイゼだったが、本当は今でもメザを愛していたし、死んだ子供を見捨てて逃げ出すことはできなかった。たとえこの世での残された生命はないにしても、永遠の生命を信じ始めたイゼにとってメザが生命の源泉であることは間違いなかった。死を覚悟した二人にはもう恐れるものは何もなかった。

「こうしてやっと、今、成就された、女に対する男の勝利も、エゴイズムと嫉妬の互いに奪い合う行為も」<sup>48)</sup>

イゼも人生の最後の時にあたって、永遠の和解を果たすべくすべてを語ろうとする。自分がした恐ろしいことの数々。メザとの間に生まれた子供が死んだこと、ひどい藁葺きの小屋でコレラで死んでいったド・シーズのこと、裏切り見捨てた子供たちのこと。そしてイゼは言う。

「ここに今、過去のすべて、善も悪のすべても、そ

れからこの二つをセメントのようにつなぐ改悛の業も、ともに、もはや、いわば一つの礎、一つの始まり、そして今存在する、現に今、永劫にかけて変わらずに存在するものと、分かちえぬ一つのものとなるのです<sup>49)</sup>

いまや古い時間が終わりを告げようとしていた。メザは言う。

「すでに、ほくのなかに感じられる、ほくの存在の、さまざまな古い力がすべて、新しい秩序へ向かって一斉に動き始めている」<sup>50)</sup>

二人は互いにそれぞれを心に焼き付けるべく、互いの徴をいま一度確認しあう。イゼは言う。

「徴は、これが最後、このおびただしい髪の毛、大いなる死の風のなかを、乱れて飛ぶ」<sup>51)</sup>

それに対してメザは言う。

「すべての帷が引き裂かれ、消え去り、このほく自身だ、雷を発する灼熱の炎の塊、神の栄光に包まれた大いなる牡、八月の、目もくらむ光のなかに立つ人間、一切が神の秩序に姿を変える真昼の時に、精霊となって勝ち誇るものだ」<sup>52)</sup>

肉体の滅びにあたって、この時突然起こった一陣の風がイゼの髪を巻き上げ、それが月の光のなかにあやしく浮かび上がる。そしてメザがもたらす徴は、彼自身の精神である。彼らの出会いの時と同じ、すべてを燃やし尽くす炎の中で、彼らの肉体を超えて彼らの存在そのものである精神が唯一の徴となるのだ。こうしてメザは、自分たちの死を誇らし気に迎え入れようとする。そしてこのすぐ後に、仕掛けられた爆弾の爆発とともに、彼らのこの世における肉体の滅びがもたらされるのである。

## 09. 結び

以上、この作品の主たる流れであるメザとイゼの運命的な愛の辿る道筋を、出会いから死の結末までを跡づけることによって、とりわけ、クローデルがその体験のほとんどを注ぎ込んだというメザという人物の苦悩の内実を辿ることにより、クローデル自身のそれを

探ろうとした。

クローデルの実人生において起こった「イゼ」との出会いは、1900年ソレムとリギュジェの修道院に籠もった後、その年の終わりから翌年の始めにかけての失意のうちの中国行きの「エルネスト・シモン」号の上でおこったとされている。その最終的な結末は、1905年に至って決定的な破局という形で迎える。そしてこの年、クローデルはこの作品を制作することになる。

そしてさらに、この年の暮れもおし迫った12月28日レーヌ・サント・マリ・ペランと婚約し、翌1906年3月結婚する。

この事実をみると、クローデルはこの作品を書き上げることにより、実人生上の「イゼ」との関係を総括したのであろうし、越えなければならぬ試練だったのであろう。作中に見られるメザは、その時のクローデルだろうし、この世での仕事の一切を捨てて修道生活を志願した時に感じた「ノン」の答えは、クローデル自身、自分の中に見出した傲慢に対するものであったろう。

## [使用テキスト]

- Paul Claudel: Théâtre I (Bibliothèque de la Pléiade) Éditions Gallimard, 1967.

以下、Théâtre I と略す。Partage de Midi (『真昼に分かつ』)には、初版(1905)、そしてパロー劇団が上演する際に書かれた上演用台本(1949)、さらにその後書き改められた新版(1949)があるが、ここでは初版に拠った。( )内は発行年。猶、このThéâtre Iには、Jacques Madaule と Jacques Petit によるクローデルの略伝と、詳しい注があり、大いに参照させて貰った。

- 鈴木力衛・渡辺守章訳『真昼に分かつ』(筑摩世界文学大系56所収)本文中の訳は、これに拠っている。また、渡辺氏による注ならびに訳者あとがきも大いに参考にさせて貰った。猶、渡辺氏の『ポール・クローデル—劇的想像力の世界』は参照できなかった。

## [参考文献]

- Paul-André Lesort: Claudel (col. d'écrivains de toujours) Éditions Seuil, 1985.

クローデルの略歴に関する部分で、上記 Jacques



Petit の略伝とともに参照した。

- 本庄桂輔『フランス近代劇史』（新潮社）  
この芝居の上演に関する資料として参照した。

[引用並びに注]

- 1) Théâtre I. p. 1332 の注に、この作品の成立について書かれているが、Francis Jammes や Gabriel Frizeau などにあてた手紙に、その当時のクローデルの意図が吐露されている。この人妻との恋は、1905年彼女の決意によって、最終的な決別をみる。彼女はクローデルの子供を生んだが、クローデルの元に来ることはなかった。そして、外交官としてのクローデルの危機を救ってくれたのが、Philippe と Hélène の Berthelot 夫妻であり、この作品は彼らに献げられている。
- 2) 実際に中国で義和団事件が起こった時クローデルはフランスにいたが、すぐに中国に呼び戻されている。彼は、この時期、福州領事をしていた。
- 3) 渡辺氏の訳注によれば、イゼは、ギリシア語の isos (平等な) の女性形から、メザは menos (中央に位する) という言葉から、ド・シーズは cis- (切断を表す) から取られている。それらは、Partage de Midi (正午の分割) という題名と同様、「中央で」「等しく」「断ち切る」という中心テーマと符号する。
- 4) Théâtre I, p. 984
- 5) *ibid.*, p. 983
- 6) *ibid.*, p. 984
- 7) *ibid.*, p. 984
- 8) *ibid.*, p. 985
- 9) *ibid.*, p. 985
- 10) *ibid.*, p. 985
- 11) *ibid.*, p. 986
- 12) *ibid.*, pp. 987,988
- 13) *ibid.*, p. 994
- 14) *ibid.*, p. 996
- 15) *ibid.*, p. 999
- 16) *ibid.*, p. 1001
- 17) *ibid.*, p. 1001
- 18) *ibid.*, p. 1001
- 19) *ibid.*, p. 1002
- 20) *ibid.*, p. 1003
- 21) *ibid.*, p. 1004
- 22) *ibid.*, p. 1009
- 23) *ibid.*, pp. 1012-1013 舞台は、Ω型の墓地の前で展開されることになっているが、これは実際福州にあったものをクローデルが写真に収めて、48年の上演の際には、殆どそのままの形が作られた。
- 24) 清朝末期の中国では、義和団事件にみられるような外国人排斥運動が活発化していた。それと同時に、孫文の革命運動も進行していた。
- 25) *op. cit.*, *ibid.*, p. 1022
- 26) *ibid.*, p. 1027
- 27) *ibid.*, p. 1029
- 28) *ibid.*, p. 1032
- 29) *ibid.*, p. 1035
- 30) *ibid.*, pp. 1037-1038
- 31) *ibid.*, p. 1039
- 32) *ibid.*, p. 1040
- 33) *ibid.*, p. 1041
- 34) *ibid.*, p. 1043
- 35) *ibid.*, p. 1047
- 36) 48年に、ジャン・ルイ・パローが上演を申し出た時、クローデルはこの部分の削除を申し出た。上演用台本では変更が加えられている。
- 37) *op. cit.*, *ibid.*, p. 1049
- 38) *ibid.*, pp. 1049-1050
- 39) *ibid.*, p. 1050
- 40) *ibid.*, p. 1050
- 41) *ibid.*, p. 1050
- 42) *ibid.*, pp. 1050-1051
- 43) *ibid.*, p. 1051
- 44) *ibid.*, p. 1052
- 45) *ibid.*, p. 1053
- 46) *ibid.*, p. 1053
- 47) *ibid.*, p. 1054
- 48) *ibid.*, p. 1055
- 49) *ibid.*, p. 1059
- 50) *ibid.*, p. 1060
- 51) *ibid.*, p. 1061
- 52) *ibid.*, p. 1062